

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文はモンゴルの伝統音楽であるオルティン・ドーの現代の変容の諸相を記述し、変容を引き起こしている社会の変化と音楽自体の変容の関係性を構造的に解明することを目的としたものである。オルティン・ドーは、近年モンゴル民族の生活形態が遊牧生活から都市の定住生活へと変わりつつあることや、西洋音楽の影響をうけて、急速に姿を変えつつある。一方、2005年にユネスコの世界遺産に登録されたことを契機に、モンゴル民族を代表する伝統音楽として内外の関心も高まっている。

こうした背景から、現代オルティン・ドーの変容の実態の把握と記述は急務であり、現代的意義が高いものといえる。また従来のオルティン・ドーの研究は、伝統的な曲の収集や、その音楽構造の分析に特化する傾向があり、諸行為を包括的に対象とし、現代的な変容の観点からその流動性を含めてオルティン・ドーの概念の再構築を目指している点に本論文の独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文では、オルティン・ドーの現代の変容を、演奏する場の問題、歌手の社会的位置づけの問題、聴き手の役割、伴奏者の役割、学習過程の問題などを切り口に分析を試みているが、これらは、アラン・メリアム、クリストファー・スモールらによって樹立されてきた、音楽を文化の中における行為として捉える民族音楽学の方法論を踏まえた上で、申請者が独自に設定したものであり、オルティン・ドーの現代の変容を捉えるものとして妥当といえる。また、本論文では資料やデータの収集にあたって、内モンゴルの伝統的儀礼のネールにおける実演、近代的なコンサートにおける実演、近代的な専門教育機関における教習、小学校の授業などの実地調査を行い、かつ世代や背景の異なる多数の演奏者、伴奏者、聴き手の意識調査を行っている。これらも方法として妥当である。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

ネールにおける実演の実地調査は伝統的な生活形態をなお継承している内モンゴル自治区の東ウジュムチン旗、小学校の授業の実地調査は、初めて正式にオルティン・ドーを取り入れ、オルティン・ドー教育の先駆的な学校となっている東ウジュムチン旗の小学校において、展開を検証するために年を隔てて3度行うなど、調査対象の選択は適切なものといえる。また実演家の意識調査は、遊牧生活の中でオルティン・ドーを身につけた50代以上の者、遊牧生活の経験はすでに無く専門教育機関で身につけた30代以下の者を中心に行っているが、これらは過去20～30年における急速な生活形態の変化がオルティン・ドーの音楽表現にいかなる変化をもたらすかを考察する上で適切な選択といえる。得られたデータの分析はいずれも背景を踏まえた上で適切に行われている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

オルティン・ドーのパフォーマンスの諸行為の現代的变化を、実演する場の変化、歌手・聴き手の意識の変化、伴奏楽器の変化、学習過程の変化などに分解して考察した上で、最後に総合化し、従来伝統的な儀礼のネールの場では一体であった歌手と聴き手が、コンサートホールにおいては独立した関係になっていること、それゆえ歌手は見せる意識を強くもちはじめ身体の使い方が変化していること、コンサートホールにおいては伴奏楽器の役割が増大していること、これらの変化はいずれも学習の変化と連動していることなどが指摘されているが、いずれも妥当なもので学術的な水準に十分に達していると判断される。またこうした変化を直視しつつも、歴史的に構築してきたモンゴル語と音楽表現の関係や、聴き手の果たしてきた積極的な役割等をいかに再構築するかがオルティン・ドーの今後の継承にあたって重要な意味をもち、そこに学校教育の果たすべき役割も見いだされるとする結論は説得力に富む。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

オルティン・ドーは内モンゴルにおいて学校教育に取り入れられつつある。日本においても諸民族の音楽は音楽教育に位置づけられており、モンゴル民族を代表する音楽として教材に取り上げられるのが常である。教材化する前提には、オルティン・ドーの現状を正しく把握する必要がある。

従来のオルティン・ドーの研究は、内モンゴルやモンゴル国においては民族性を象徴するものとしての意義を見出すことに主眼があった。一方、日本、欧米などのオルティン・ドーを他者の文化として考察する民族音楽学研究では、文化の中で捉える視点をもってはいたが、モンゴル民族の社会構造の理解が不十分だったために誤認もあり、現代における変容の諸相を体系的に通観した研究もなされてこなかった。こうした状況下にあつて本論文において現代のオルティン・ドーの変容の構造を社会の変化と関連させつつ解明し、詳細に提示したことは、オルティン・ドーの現状を正しく理解するための基礎的研究として高い意義を有すると評価される。

とりわけ伝統的な儀礼の場における積極的な聴き手の存在を踏まえて、学校教育の場における聴き手の養成の重要性を説いたことは、独創性に富むものといえる。ここには伝統音楽を音楽教育に取り入れる際のひとつの在り方が示されていると評価される。

なお、伝統的な生活形態の変化、西洋音楽の圧倒的な影響力によって伝統音楽が変容を余儀なくされているのは、オルティン・ドーに限ったものではない。変容は個々の事例に固有の問題を含むものではあるが、本論文で示されたオルティン・ドーの現状は他の事例の解釈にも有効な示唆を与えるものといえる。伝統音楽と学校教育の新たな関係性の構築は当該分野における重要課題の一つであるが、本論文はその点においても評価に値する研究といえる。

以上の観点から、審査委員会は全員一致で本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与にふさわしい論文であると判定した。